

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

リーダーシップ論への違和感 (巻頭エッセイ)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 関, 雄二 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5130

リーダーシップ論への違和感

関 雄二 (国立民族学博物館教授・アンデス文明研究会顧問)

この度の東日本大震災で犠牲になられた方々に哀悼の意を捧げるとともに、被害に遭われた方々に謹んでお見舞い申し上げます。

マスコミの報道を見ると、3月11日を境に日本人は総評論家になったかと思われるほど、さまざまな分野の人々の発言を耳にし、目にします。私自身も文化人類学者、アンデス考古学者として何か発言すべきかどうかこの2ヶ月間考えてきました。というか考えざるを得ないほど、意見や提言の嵐が周りに吹き荒れているという状況が目前にあります。そんな中で整理してみたこと、違和感を持ったことを記してみようと思います。

私の研究する人文科学の分野では、政治学や経済学などの社会科学ほどではないにせよ、自らの研究成果は、論文のほか、論壇あるいは評論という別の手段や場を使って表明することができます。論壇は、論文ほど引用や検証の厳密さは問われず、また未完成な研究の骨組みや見通しを示すことだけでも許される場です。論壇は、かつては新聞や雑誌に限られていましたが、いまやテレビやネット上のホームページやブログという新しい媒体を利用することもできます。文字数が制限されるツイッターはおそらくは論壇には向いてはませんが、論壇の意見交換として座談という古典的な仕組みがあることを思えば、情報という空間において究極に拡大した座談装置がツイッターであると考えられるでしょう。

さて震災関係の記事には、地震、津波、原子力、経済などの専門家が毎日のように登場し、論壇や評論の場で具体的な批判や提言が展開されています。現実社会との直接的接点を持ちながら専門的な知識を社会還元するこうした方々の発言の重さを感じつつ、専門的な発言ができない私などは、自分の存在意義がどこにあるのかと禅問答を繰り返してしまいます。一方で、ひどく違和感を持つのは、震災の復興や原発事故処理を担当する政治家や東電執行部に対する批判的な報道や論壇発言です。

私とて現在の政府に全面的な信頼を置くものではありませんし、原発事故処理にも問題が多いとも感じましたが、だからといって菅首相に対する批判にすぐになぞくことも出来ません。理由はきわめて単純で、批判の根拠となるデータが示されていないことに加え、批判があまりに表層的であるからです。マスコミが政治家を批判するのは健全な営みではありますが、研究者や知識人が論壇を利用して異議申し立てを行うのなら、その根拠と視点を示すべきだと考えるからです。そんな中、共感を覚えた記事がありました。

著名な政治学者の藤原一東大教授が朝日新聞に寄せた文章でした(2011年4月19日夕刊 <http://pari.u-tokyo.ac.jp/column/column35.html>でも閲覧可)。そこには「学者の本業

は、すでに終わった事件や決定を跡づけることだ。霧が晴れ、資料も揃い、何が可能で何が可能ではないかがはっきりした時点で議論するのだから、頭が良さそうにも見えるだろう。だが、その頭の良さは役立たずと表裏の関係にある。現場で選択を迫られたときに学者が適切な判断を下すことができるとは考えにくい。」と、きわめて自制的な文章が淡々とつづられていました。「時事評論は、後出しジャンケンの特権を捨て、実務家と同じ「現在」における選択を議論する空間だ。「現在」の言論を支配する共通理解、社会通念、あるいは偏見に自分もとらわれたままで議論する危険は免れない。実務家とともに霧のなかのピエロを演じることもなるだろう。実際、同時代に書かれながら後の時代の検証に耐える時事評論は、ごく少ないのである。」と述べています。最後に、自分が今回の震災で立ち向かうべき問題を捉え、これまでの社会通念を相対化していきたいと文章を閉じています。もちろんこれでは何も言っていないと言われるかもしれませんが、表層的な発言を繰り返す評論家よりは信頼がおけると思いました。

藤原さんの発言に共感しつつ、菅政権に対する批判に違和感を持った理由の二つ目はリーダーシップ欠如論です。政治学者、あるいは歴史学者が論壇に登場し、過去の震災やリーダーの行動をとりあげ、菅首相との比較を行うという形が展開されています。そこでは関東大震災後、一月も経たずして当時の山本権兵衛首相下に設置された帝都復興院を率いた内務大臣後藤新平や、1755年にポルトガルで起きたリスボン地震で復興に尽力を注いだ宰相セバスティアン・デ・カルヴァーリヨ(後のポンバル侯爵)を引き合いに出すなど実に安易な比較が行われています。

これらの発言には、首相のリーダーシップ欠如を訴えることで外野からの鼓舞につながるという効果があるとしても、自らの学問を背景にした論壇や評論としてはお粗末と言わざるを得ません。批判に欠如しているのは、リーダーの権力基盤やそれを支える仕組みに対する言及です。菅首相のリーダーシップを批判するのは自由ですが、個人が個人という能力だけではなく、社会的仕組みの中で行動せざるを得ないことを思えば、その仕組みに対する冷静な分析は必至なはずで、この点に答えている論壇発言は僅かですがありました。

私の親友の教育社会学者荻谷剛彦オックスフォード大学教授の寄稿文です。日本経済新聞(4月20日朝刊)に掲載された「『学歴インフレ』脱却急げ」という論考で、その内容は、偏差値ランクの高い大学入学者ほど大企業への就職が有利になる傾向が近年とみに高まる傾向を示した上で、これが終身雇用による長期の職業訓練体制が崩壊しつつある現在の企業環境では人材養成の拡大につながらないとし、大学教育の高度化とそれに対応した企業の方針転換を訴えているもので

す。昔、私同様に授業に出ず、友人のノートを借りて急場を凌いでいた彼の発言だと思つて笑ってしまうのですが、とりあえずリーダーシップ論とは無関係にも見えます。しかし、論考冒頭に日本社会における指導者の姿を大学教育システムの問題になぞらえて触れている箇所があります。

荻谷さんの指摘は、戦後日本が築き上げてきた社会組織について、「トップダウンの指導力で動いているのではない。平均的な人材の質の高さを前提に、現場の集団的・協同的な力によって機能を発揮する。」と述べています。荻谷さんは、長年、この考えを検証すべく、大学入試における偏差値や就職先ばかりでなく、親の職業や収入などとの関係などさまざまなデータを解析し、検証してきました。その成果は『階層化日本と教育危機』(有信堂)に結実し、大佛次郎賞の受賞にもつながりました。ですから、決して軽い発言ではありません。

荻谷さん自身も菅首相のリーダーシップ欠如に失望しつつも、その視線は自らの研究の延長線上に向いているのです。私がここで述べたいことは、菅首相のリーダーシップ欠如が見えてくるとするならば、それはそのようなリーダーを求め、創りあげてきたのはわれわれであり、日本社会の構造がそれを生みだしている点にほかならないということです。先の藤原さんの考えを借りるならば、問題はその社会構造と其中でのリーダーシップにあり、仮にそれを批判し、リーダーシップ論を展開するならば、強力なリーダーシップを許す社会とは何なのか、あるいはどこまでそれを許容するのか、そしてそれを許容するならばどのように構造を改変していくべきなのかまで冷静に見つめるべきということなのだと思います。今回の震災でも被災地で活躍する数々のリーダーが出現しました。こうしたリーダーを輩出したのは、日本的組織社会であり、これを捨てて強力なリーダーの力にすがる社会を作る覚悟が私たちにあるのでしょうか。地方分権に逆行する恐れはないのでしょうか。問題はかなり複雑なはずですが。

ただし、ここで誤解して欲しくないのは、こうした社会構造、体制、仕組みにリーダーシップ欠如の要因すべてを押しつけようと考えているわけではない点です。私たちはシステムに操られるだけの存在ではなく、主体的な行為を常に繰り返す存在です。この行為は、構造全体にたゆまず働きかけを行うことで緩やかにせよ構造自体に変化をもたらします。その意味で言えば菅首相の主体性は、日本的リーダーシップを変える可能性も十分にあるはずですし、そのリーダーシップを支えてきた私たち自身の行動によっても、リーダーと社会は変わるはずですが。大学教員という立場からすれば、荻谷さんの提言を活かすべく日々努力することも選択肢の一つでしょう。

私はこれまで古代アンデス文明の研究の中でもリーダーの権力構造に関心を寄せてきました。そこでは、さまざまな権

力基盤に立つリーダーの存在が明らかになり、それぞれのリーダーは緩やかな連携、関連を持ちながら、権力のあり方や権力が行使される社会そのものを変えてきたことも指摘してきました。中にはその果てに権力を喪失し、社会が崩壊していったケースもあります。このようにリーダーは自らの社会、そして外部社会と交渉を重ね、主体的な判断を行い続ける存在なのです。

リーダーが何をして何をしなかったのかで評価するのは、歴史上著名な政治家の功績の羅列ばかりを覚えさせられてきた歴史教育に由来する悪弊でしょう。問題はリーダーと社会の関係にあるのです。もう表層的なリーダーシップ論はたくさんです。



.....

関 雄二 (せき・ゆうじ)

1956年東京生まれ。

国立民族学博物館研究戦略センター教授ならびに総合研究大学院大学教授。専攻はアンデス考古学、文化人類学。1979年以来、南米ペルー北高地において神殿の発掘調査を行い、アンデス文明の形成過程を追うかたわら、文化遺産の保全と開発の問題にも取り組む。

単著として『アンデスの考古学』(同成社)、

『古代アンデス 権力の考古学』(京都大学学術出版会)、

共編書として『文明の創造力』(角川書店)、

『アメリカ大陸古代文明事典』(岩波書店)、『古代アンデス 神殿から始まる文明』(朝日新聞出版)がある。